



大阪府立北野高等学校図書館

第2号 2017.6.16

さあ、また本でも読もか！

授業で、常々強調するのは、教科書をよく見ること、さらに本を読むこと、新聞を大切にすることである。今年、私は日本史のうち近世の部分を担当しているが、国際日本文化研究センター(日文研)の研究者二人(井上章一・呉座勇一)による昨年来の売れ筋新書を読んでいたら、教科書の行間から新たに見えてきたことがあった。

* 原文から引用した部分は< >を付けて示した。

織田信長について、山川出版社の『詳説 日本史B』(以下、『詳説』と記載)は< **滞在した京都の本能寺で、配下の明智光秀に背かれて敗死した** >と記し、これ以上の説明は不要という感じである。本能寺は、寺町通御池下ル(南側)にある法華宗(日蓮宗)の寺院であるが、信長はなぜその寺(現在と場所は別)に寝泊まりしていたのだろうか？一つの答えを井上著『**京都ぎらい**』が教えてくれた。< 信長や光秀の生きた時代に、今日的なホテルはない。… だから寺をそのためにつかってきたのである。… 信長が本能寺に宿をとったのも、室町以後のそんな慣例にしたがったのだと、みなしうる。従業員の、いや僧侶たちの接遇ぶりも気にいって、信長はこの寺をひいきにしたのだろう >。ちなみに、仏教勢力と敵対した信長も名義上の宗旨は法華宗。なので本能寺が「お気に入り」というのは自然。井上さんのユニークな探究はさらに京都の寺の「おもてなし」が向上していく様にまで進められるので、ご一読を。

『**京都ぎらい**』よりも新しい呉座著『**応仁の乱**』は信長の時代の前史を扱った本である。そこで< (各地の守護館に) 地域的な特色・個性は見られない。こうした守護館の構造は、「花の御所」(室町殿)などの将軍邸を模倣したものだった。… 越後守護上杉氏が府中に構えていた館には犬追物を行う馬場や賓客を泊める禅宗寺院が付属していたという。… 川の西側に守護館を建てる事例が多いのも、鴨川の西に平安京が築かれたことに学んだのだろう >という箇所に出会った。室町期以降、京都のお寺はホテル機能を果たしていたので、国元(地方)に下ってきた守護大名らは京都スタイルを再現しようとして< 賓客を泊める禅宗寺院 >を付設したのだと納得した。ちなみに、二条城で配布されているリーフレットには、徳川家康が天皇の住む御所の守護と将軍上洛の際の宿泊所とするためにこれを築城したという説明がある。二条城や諸藩の京屋敷が出来た江戸時代になると、状況は変わるのである。

授業では、歴史小説や時代小説を切り口に勉強に入ることも勧めている。はっきり言って図書館には「歴史小説」が多く「時代小説」は少ないけれど、その間に本の値打ちの差はない。フィクション性の多少が両者を分けるのだろうが、作家がファクトを十分に踏まえないと面白いフィクション≪作り物≫は書けまい。他方、想像力の働かないノンフィクションはきつとつまらないと思う。

『詳説』の< **戦国大名の中で全国統一の野望を最初にいだき、実行に移したのは尾張の織田信長であった** >という書き方は、教科書にしては劇的。しかし、魅力的な人物像までは伝わらない。信長=尾張の大殿(シニョーレ)の心と行動を描く辻邦生の歴史小説が『**安土往還記**』— 故郷のジェノヴァを捨てて、宣教師を日本に送りどけるために渡来したある船員による私信という体裁をとっている — で、数年前、ある公立大学の日本史の二次試験に使用され

た。辻さんは、歴史学者をも満足させる研究調査を踏まえながら、豊かな想像力をめぐらせた作品群で知られる。

『耶蘇会士日本通信』中のルイス＝フロイス書簡にはく此の尾張の王は、… 長身瘦軀、髯少し。声は甚だ高く、非常に武技を好み、粗野なり。… 決断を秘し、戦術に巧にして、殆ど規律に服せず、部下の進言に従ふこと稀なり>などとあるのを、小説の方ではく… 正面の引き戸が左右に開くと、家臣団に囲まれた長身の人物が入ってきた。フロイス師の言葉のように、蒼白な、面長の、引きしまった顔立ちで、鋭い眼をし、右の顚顚(こめかみ)がたえず病的にひくひくと動いているのが目についた。それが「彼」であることは一目瞭然であった>と書く。映像的な描写が、瞬間、信長を生きたシニョーレに変える。

『詳説』でく**信長のあとを継いで、全国統一を完成したのは豊臣(羽柴)秀吉である。尾張に生まれた秀吉は、… したいに才能を発揮し、信長の有力家臣に出世した>**のくだりが「太閤記、風に読めるのもちょっと面白い。だが、教科書は秀吉がく**1588年に海賊取締令を出して倭寇などの海賊行為を禁止し、海上支配を強化>**とは書いても、これが「村上海賊の息の根をとめるような布令」であったとは触れない。城山三郎の歴史小説『秀吉と武吉』ではく海賊船は許せぬ、というだけではない。… 海で自由に生きてきた者を、その土地土地の地頭や代官が調べ上げて管理し、海賊をしない旨の誓書を出させる。これを領主が取りまとめ、もし海賊行為があったときには、その領主の責任として、土地など取り上げる>と説明する。その村上武吉の海賊行為とはく遠くは博多津や豊後の府内、沖浜などにまで人を出し、そこで積荷の割を帆別錢(ほべつせん)として徴収する。引きかえに村上の印のついた旗を渡し、瀬戸内をこの旗をかかげて航行させ、航海の安全を保障してやっていた>ことを指すのであるが。

なお、専門の経済学で大学の教壇に立ち、後に直木賞を受けた城山さんには、近代以降を扱う作品も多い。『男子の本懐』や『落日燃ゆ』を読むと、昭和前期の歴史への関心と理解を大いに助けると思う。

北野生諸君。再度確認する。教科書信頼すべし。ただし、物事は見かけどおり(教科書どおり)とは限らないという視点も将来は大事。すべてを疑えとの金言もある。一例を示そう。

『詳説』には、《江戸時代初期の外交》に関してく… **幕府は1604年、糸割符制度を設けて糸割符仲間と呼ばれる特定の商人らに輸入生糸を一括購入させ、ポルトガル商人らの利益独占を排除した>**とある。それだけのことだろうか？ではポルトガル商人らの得ていた利益はどこにまわったのだろうか？この**S** 主語(=幕府)－**O** 目的語－**V** 述語を連ねた複文では、幕府と糸割符仲間の本当の関係性が見えてこない。それに気づかせてくれたのが、『安土往還記』と同著者の歴史小説『天草の雅歌』の次の部分であった。(辻さんはこれら長編小説二作をほぼ並行して執筆している)

く幕府が開かれた当時(注 徳川家康が征夷大將軍の宣下を受け、江戸に幕府を開いたのは1603年のことである)、幕府自体の財政力はまだ不安定であり、貧弱であった。たとえば、そのころポルトガル船船長から輸入生糸がまったく売れず困却し、その一括購入を嘆願する書面が幕府につたえられた。その時幕府にかわってこの生糸買付けを引きうけたのが前記(注 関ヶ原の戦いで徳川方に味方した)商人団であったが彼らはその代償として多くの特権を与えられた。その一つが生糸買占めの権利であり、また、新たな渡航船への朱印状の交附である>。つまり、天下分け目の戦いに勝利したものの、戦後経営の財源をひとえに商人団に仰がなければならなかった幕府にとって、く商人団の経済力が伸びれば伸びるほど、幕府の

財政は豊かになり、また幕府の権力の保護があればあるほど、この商人団の経済力は伸びてゆくことになる。もちろん幕府は権益のともなう長崎交易を直轄した。

幕藩体制と「鎖国」体制の成立期を背景とする歴史小説『**天草の雅歌**』は、長崎奉行配下の通辞(通訳)上田与志と、母がポルトガル人である女性コルネリアとの恋愛小説だし、同時に歴史的現実の絡み合いを教えてくれる経済小説、政治小説の内容をもった謎解きのミステリーでもある。大きくて、深い読み味を味わってほしい。

5月13日付『日本経済新聞』朝刊の文化面を、【室町の混沌 現代の鏡に 新たな視点の歴史小説相次ぐ ― 格差やバブル 研究進む】という見出しの記事が占めた。注目すべきは前述の『**京都ざらい**』や『**応仁の乱**』のような中世に関する学術の進展と、室町時代を題材にした歴史・時代小説の出現とは相関があるということだ。図書館にも「室町小説」が蔵書として入って来るので、是非読んでみるとよい。しかしながら、時代小説では戦国時代もの、江戸時代ものがまだまだ圧倒的多数派である。

江戸後期の火付盗賊改方長官で、旗本の長谷川平蔵を主人公とする時代小説、池波正太郎著『**鬼平犯科帳**』は図書館の蔵書にはないけれど、この春のセンター試験に「長谷川平蔵」は出た。その問題中の史料が、平蔵に「組のもの召し連れ、… 手にあまり候はば、切捨てに致し候ても苦しからず」と指示している辺り、テレビ時代劇の鬼平そのまま(中西龍アナウンサーのナレーションを殆どの高校生が知らないのはやむを得ない。が、何か惜しい)である。鬼平を当たり役とした二代目中村吉右衛門が、小玉祥子著『**二代目 聞き書き 中村吉右衛門**』の中で、出演にあたり制作側に一点だけ原作に基づいたオーソドックスな時代劇に>と注文を出し、<立ち回りなどアクションの場面は派手でいいけれど、そうでない部分に、武士の世界や江戸の良さと雰囲気を出したかった>と語っているのは、要するに池波さんの原作が事実をしっかりと消化したものだからということだろう。作品が描く人間模様に今も昔も大差はないが、現実の東京に江戸のリアリティーを見つけるのは難しい。だからテレビは、現代において「江戸」の雰囲気を残す京都周辺で撮影し、吉右衛門さんの要請に応じている。

さて、『詳説』には松平定信の寛政の改革に関わり<治安対策として… 石川島に人足寄場を設け、無宿人を強制的に收容し、技術を身につけ職業をもたせようと試みた>とある。人足寄場を建言したのが長谷川平蔵であるが、その名は教科書には載らない。寄場を描いた時代小説というなら、山本周五郎著『**さぶ**』を外せない。<小雨が霏(もや)のようにけぶる夕方、両国橋を西から東へ、さぶが泣きながら渡っていた>という書き出しが、読書心をつかむ。作中、岡安喜兵衛同心の<私はこの寄場を確保し、育ててゆきたいと思う。… 犯罪者になりそうな性格や境遇にある者を、犯罪者になることから護り、職業と資金を身につけて世間へ復帰させる、ということには大きな意義があるし、人口の増加と生活状態とで、ますますむずかしくなる江戸という大きな世帯では、これからもっと重要な役割を負うことになるだろう>という語りは、現代社会においても重く響く。人足寄場は今の府中刑務所のルーツである。

鎖国の動揺期、<伊勢の船頭であった大黒屋光太夫は、嵐で漂流し、アリューシャン列島に漂着… ロシアの首都ペテルブルクで女性皇帝エカチェリーナ2世に謁見したのち、送還された>と、『詳説』は脚注に記している。この時代と大黒屋光太夫を知るには、井上靖の歴史小説『**おろしや国酔夢譚**』を薦める。作中に<光太夫は、… カムチャツカの港々の有様を眼に浮かべた。

そこに住んでいる土着民、その土着民を追って、そこに進出しているロシア人たち、毛皮を満載しているロシアの艦船、ドック、倉庫、兵舎、税関、教会。光太夫はこの時ほど日本という国が小さく、しかも無欲に無防備に見えたことはなかった。蝦夷の北方に広がっている大海域でいかなることが行われているか、自分たち六人の漂流民以外、日本人は誰も知ってはいないのである。光太夫はどんなことがあっても、日本へ帰らなければならないと思った。… 帰りたいかつたし、帰らねばならなかつたし、帰るべきであると思った」とある。エカチェリーナ2世に謁見した光太夫がロシア語で苦難をく一通り語り終えた時、「死者は全部で何人なるや」という女帝の声が遠くで聞えた。「十二人でございます」光太夫が答えると、「オホ、ジャルコ」と、低く女帝は(哀悼の意を表す言葉を)口に出して言った。… 光太夫は退出して行く女帝を拝しながら初めて、女帝が神でも仏でもなく、女体を持った権力者であることに気付いた」というのは、何れも作者のリアリスティックな想像力の産物であろう。

このほか、江戸末期の状況を理解するためには、島崎藤村著『夜明け前』が恐らく最適であろう。過去の時代を誠実に探り求めたこの大歴史小説については、一昨年の『図書ニュース』でも取り上げたから、ここには書かない。

最後に。生徒自治会発行の2017年度『年誌』所収 北野大辞典は、図書館に関して、く図書室ではない。大量の本が収められている。ただし、閉架図書に入っている本が全体の半分を超えるため、あまり「たくさん本がある」という雰囲気はない」と記している。真実なので、読みたい本は積極的に《貸し出し》を求めてほしい。

◀ 今回のお勧め本一覧 ▶

* ()内は蔵書の請求記号

『京都ざらい』(302/I13/3) 朝日新書

『応仁の乱 — 戦国時代を生んだ大乱』(210/G14/2) 中公新書

『安土往還記』(913/T54/1) 筑摩書房

『秀吉と武吉 — 目を上げれば海』(913/S28/7) 朝日新聞社

『天草の雅歌』(913/T54/4) 新潮社

『二代目 聞き書き 中村吉右衛門』(774/K10/1) 朝日新聞出版

『さぶ』(913/Y18/3) 新潮文庫

『おろしや国酔夢譚』(918/G6/1-12) 講談社「現代の文学 12 井上靖」他

『夜明け前』(081/I1-7/24-2. 3. 4. 5) 岩波文庫

(918/S1/3-11・3-12) 筑摩書房「藤村全集」第十一・十二巻 他